

20 保育園は、人への信頼と生きるよろこび、そして希望をはぐくむところ

川端 隆（社会福祉法人新田保育園理事長）



なかまこともしょ……

社会福祉法人新田保育園の歴史は、一九四七年、戦後間もない社会混乱と生活困窮の時代に、地域で子どもを預けられる保育所の要求が高まるなか、自主的に荒川の土手で「青空保育」をはじめたのがスタートでした。しかし、青空保育では天候や季節の影響を受けやすく、実際の保育は困難の連続。財政基盤がまったくない状態のなかで考え出したのが、東京都の古バスを払い下げてもらい「バス保育」をすることです。その後、親や地域の協力をえて木造の園舎が建設され、一九五一年に東京都の認可、一九六八年に社会福祉法

人としての認可を受けることができました。その後も何度か園舎の建て替えをおこない、現在、創立七五年を迎えています。

新田保育園が、長きにわたり社会が大きく変わるなかであっても一貫して大切にしてきたのは、人を信頼し、人を大切にすること、そして共にゆたかに育ちあうこと（みんなが一人を）を理念とする保育実践と民主的な園運営を模索してきたことにあります。ふり返れば、地域の支援を受けながら保護者や職員が多くの困難を乗り越えてきました。いつもそばになかまがい、なかまと一緒にとりくむ保育園でした。

子どもの思いに寄り添い、一人ひとりを大切に

私は一九七七年にこの保育園に就職し、保育士として一九年、園長として二〇年、その後業務執行理事を経て、現在理事長として二期目を迎えています。長く保育に関わるなかで、そして若い時期に労働組合の役員を経験したことで、人に支えられ安心感を得たことや、矛盾した社会を知り、保育制度拡充の必要性を実感し運動をしてきました。また、保育は一人ひとりの子どもの思い（やってみたい、できるようにしたい、大きくなりたい）に寄り添って、実現させていくことの大切さを学びました。

安心して友だちと育ちあう保育園をめざして……

保育園での二つのエピソードから、めざしたい保育実践を紹介したいと思います。

四月、三歳児クラスで新人児が食事中にスプーンをこぼし、泣きだしました。そのようすを見て、「大丈夫だよ、こぼしたら（ティッシュで）拭けばいいんだよ」「服が濡れたね、着替えよう」と言って、ティッシュを拭いたり、着替えの服をもってくる、同じグループの

子どもたち。乳児期から保育園の経験がある子どもたちは、自分の体験を通して、保育士の関りから自分が受け止められてうれしかった気持ちや安心感となり、そのことが友だちの気持ちを理解し、「こんなふうにやればいいんだ」と関わる力になっているのだと思います。

五歳児が竹馬の練習をして多くの子が乗れるようになってきたとき、Aくんがなかなか練習をしない状況がありました。保育士がA君の気持ちをみんなの前で聞いてみると、「ボクも乗れるようになりたい」とAくん。保育士が「じゃあどうする？」と聞くと、「（上手に乗れている）Bくんに教えてもらいたい」と言いました。自分本位だったBくんはうれしそうに「いいよ」と言って、一緒に練習をはじめました。Bくんがとてもやさしく上手に教え応援をするなかで、Aくんもやる気を出し、一步一步、歩けるようになってきました。「乗れたね！」と一緒によろこび合い、友だちの役に立つことによるこびを感じる姿がありました。

子どもたちは、だれもが「やってみよう」「できるようにになりたい」と成長したい思いをもってきます。子どもの思いが大切にされ、安心して友だちと育ちあう保育園を、さらにめざしていきたいと思っています。